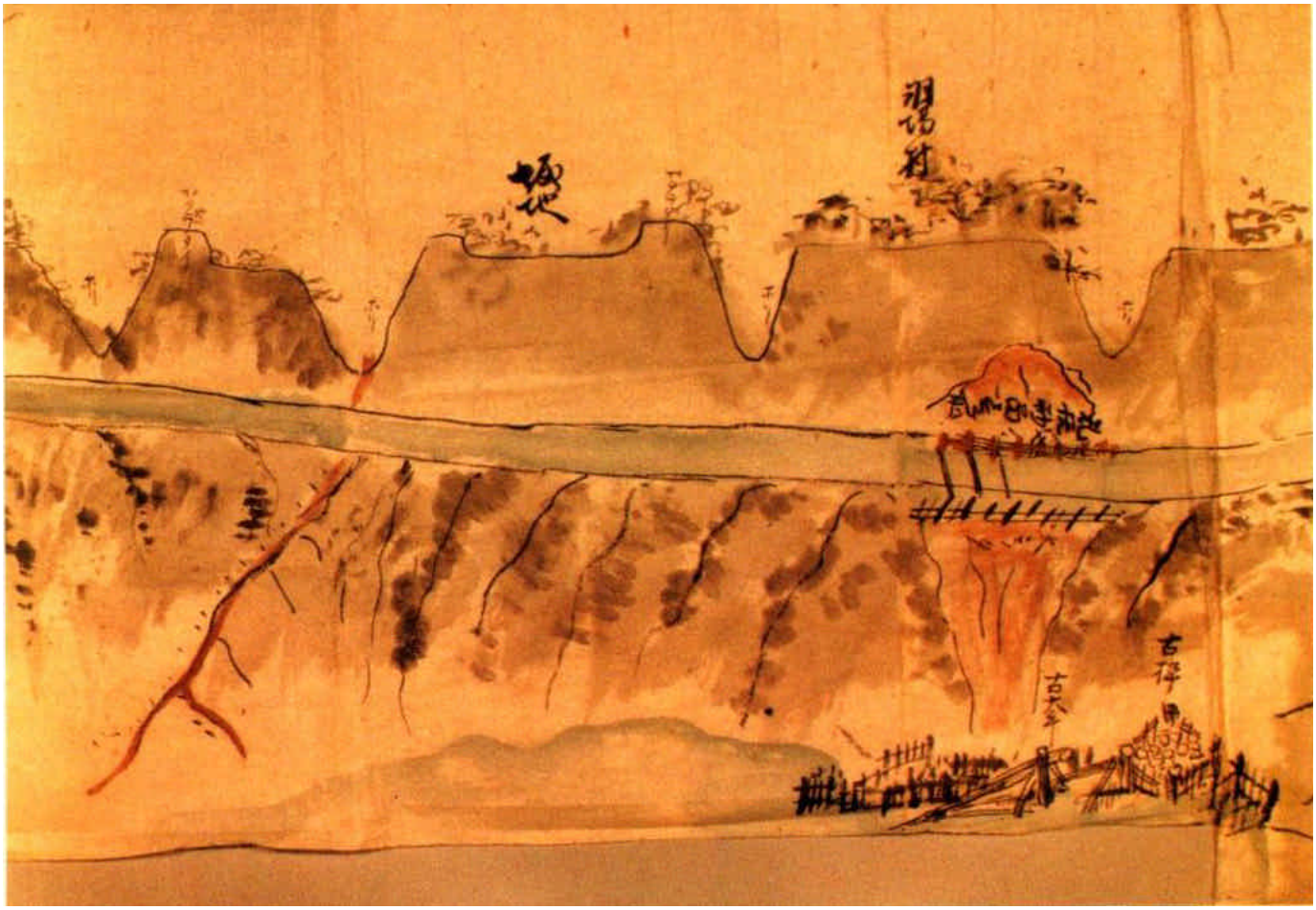
羽場城跡遺跡発掘調査概要

手長神社社務所新築工事に先立つ試掘調査



羽場城跡図　（文化11年井筋川除絵図部分）

辰野町誌より抜粋

辰野町教育委員会

羽場城跡

西山から流れ出る北の沢川は深い解析谷を作って天竜川に注ぎ、 右翼扇状地には北大出と羽場、左翼には古城原台地を作り、その先を削った天竜川は東に向きを変えて流れ、羽場淵を作っている。北大出の鞍掛の地名は、この深い北の沢川の崖に基づく崩落地名で、『諏訪御符礼之古書』に見える文明19年(1487年)の諏訪信濃守継宗の鞍掛の陣というのはこの古城原かと考えられる。古城原の台地の先端は今はすっかり開発されてなくなってしまったが、武田氏侵攻の時の羽場城はやはりここであったと考えられる。

その後、柴氏によって羽場淵を自然の要害としてその南の台地城に築かれたのが新しい羽場城と考えられ、これは北から見れば崖上の山城であるが、他の三方から見れば平城である。伊那谷には段丘崖上に築いたこのような平山城がきわめて多いが、この羽場城はその最北端に当たる。そして回の字形に内郭と外郭が土塁と堀で構築されている。この城跡は鉄道工事や神社建設その他近現代の開発で原形を大部分失ってはいるが、もともと未完成の城だったといわれている。 ― 『辰野町誌　歴史編』より

羽場城跡の現状と歴史的背景

羽場城は50m四方の方形で、北側には羽場淵が存在し、他の三方は土塁(どるい)と堀が巡らされている。現在の土塁は高さ約3mを測り、その外側に存在する空堀も約3m程掘り込まれている。主格部(しゅかくぶ)の東西には平坦部が造られ、その外側には外堀と、土塁が築かれていることが文化11年の井筋川除絵図から推察することができるが、現在は外堀は埋められ、土塁は開発の結果としてその多くを削りとられ、当時の様子を伺い知ることはできない。しかし、東側の郭については当時の区画が推定でき、絵図に示されている櫓台(やぐらだい)が造られていたと考えられる約10m四方の高まりも確認できる。

また外土塁南東隅部には、堂山と呼ばれる無量寿庵跡地付近には、小山が2ヶ所残され、築造当時の外土塁の規模を推察することができる。さらに、土塁南側に沿った小路を堀跡と伝えている。

『長野県町村誌』では「天文年中小笠原十二郎居住すと云跡あり」と記載され、『小平物語』では近世初頭に上伊那十三騎の一人である柴氏がここに居住した事を伝えている。柴氏は寛永13年(1636年)に保科正之の移封にしたがって最上に移住し、これに伴って館も廃棄されたのであろう。

なお、この城跡は未完の城とも伝えられ、柴氏は主郭部のみを居館として使用していたことも考えられる。 ― 『羽場城跡指定候補物件調査書』より

羽場城主郭部

鉄道の建設によって西側の土塁は破壊されてしまったが、主郭部は神社の存在によって良好な状態で保存されてきた。

羽場城遠景

城跡南側から望む。線路の向こう側に見える土の部分が外土塁。木が生い茂っている所が主郭部。

外土塁

同じ土塁を角度をかえて撮影。耕作によって徐々に平らにならされている。

天竜河畔から羽場城を望む

ここから見ると羽場城は山城のようにそびえたって見える。

堂山付近

外土塁南東隅部の堂山と呼ばれる無量寿庵跡地付近には、小山が2ヶ所残され、築造当時の外土塁の規模を推察することができる。さらに、土塁南側(写真左)に沿った小路を堀跡と伝えている。

櫓台跡推定地

東側の郭については当時の区画が推定でき、絵図に示されている櫓台が造られていたと考えられる約10m四方の高まり(上写真)も確認できる。

右の写真は東側の外土塁と考えられる高まり。

主郭部土塁

　現在の土塁は高さ約3mを測り（青い点線部）、その外側に存在する空堀（赤い矢印部分）も約3m程掘り込まれている。

手長神社参道

　現在の手長神社参道。主郭部の防禦を考えると、城館跡が使用されていた時点でこの道が存在していたかは疑問である。

調査地区全体写真

基礎に影響のない地点に、幅約2mのトレンチ（溝）を十字に掘って建物の跡の有無を確認した。

東西方向トレンチ

南北方向トレンチ

建物址礎石

黄色線が建物の礎石の並んでいる方向。赤色の矢印が小皿出土地点

灰釉（かいゆう）陶器小皿出土状況

内耳土器口縁部破片

灰釉陶器小皿

まとめ

この調査は、手長神社の改築に先立って、平成7年7月3日～7月6日まで行いました。当初、神社の建設によって破壊が進んでいるとの見方を町誌の編纂時にはしていましたが、今回の調査によって中世の遺構は水田造成の際かと考えられる埋め土によって保護されており、調査時には建物の基礎となる礎石が見つかり、良好な保存状況であることが判明しました。この建物は内土塁の方向と一致しており、礎石間の距離は約1.85mで南北方向に3間（一部は調査時の土層観察時に出土したため、破壊してしまった。）、東西に2間見つかっています。

この他にも石が集中して出土している場所や浅い溝なども見つかり、溝付近からはほぼ完全な形の皿が出土しています。この皿は製品となった後で再度焼けており、城館跡が燃えた可能性もあります。その他には日常煮炊きするのに使ったと考えられる素焼きで、内面に把手の付いた「内耳土器」と呼ばれる鍋も破片で出土しており、城館跡が戦国時代後半期には既に生活の舞台となっていたことを示す証拠となっています。

また、手長神社が明治43年にこの場所に移されるまでは主郭内は水田として使用されていたことが調査によって明らかになりました。これは、この地区の土地の売買証文にありますが（岡田耕治氏教授）、今回改めて証明された形となりました。このことによって、水田の水をどのように主郭部まで引いていたのかが問題となってきました。この問題は、城館跡が使用されていた当時の水の引き入れ口の解明にもつながっていくものと思われます。

また、県道与地－辰野線の拡幅事業に先立って外土塁の南側を調査しましたが、この道沿いからは中世の遺構は確認できませんでした。このことから県道付近は城館跡の外側であることが分かってきました。

しかし、この道は江戸時代（1,736年－元文元年に現在の相合橋に関しての記載がある）には既に使用されていたと考えられる道であり、現在この道を挟んで立ち並ぶ家の町割りが道路の北と南で若干食い違いがある事も分かっており、この状況からここに城下町が存在していた可能性が考えられます。

今後、地割りや、周辺の調査によって羽場城を中心とした羽場地区の様相が徐々に明らかになっていくと考えられます。

道の食い違い

城館跡方向(写真左)から来る道と、南に伸びる道(写真右)が県道をはさんで食い違っていることが分かる。

内耳土器（堀の内遺跡出土）